Shimotsuma, Toronosuke下間寅之助 (1878-1925)︰ Shimotsuma was a coin dealer and author of a few numismatic works. Shimotsuma also started a periodical about coins entitled Kosen (古銭) that was published from 1917-1925. He also produced several editions of Taishō shinsen kosen no shiori 大正新撰古銭之 that catalogued pictorial coins (e-sen) and Dai nihon koshihei meikan 大日本古紙幣銘鑑 which explored Japanese paper money. Shimotsuma also published Torasenro tomojo (romanization?) 虎僊楼搨模帖. This was a twelve volume set of rubbings of his coin collection. It was reprinted in 2017 and the book cover is shown below with the author's photograph and two extracted pages from this book.



Torasenro tomojo (romanization?) 虎僊楼搨模帖

大正六年五月十七日第三種郵便物認可
大正六年十二月十五日發行（毎月一回十五日發行）

古錢

第八號

大阪古錢雜誌社



古錢第八號

目次



大和王子驛
泉々堂
後藤茂助君

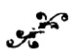
泉々堂後藤茂助君

後藤氏は三重縣龜山町の人にして前に職を關西鐵道會社に奉し後ち關西鐵道が鐵道院の買收する處となれる爲め轉職して湊町保線事務所詰となり管轄區内の名古屋湊町間山田京都和歌山間を日々巡視せし傍ら古錢家を訪問して錢談を聞き又古錢の探收尤も熱心を極め閑を得れば下間虎僊樓に出向きて研究に沒頭す又古鏡及び慶長以前の金石文の榻模や淀川より發見する土人形の蒐集を以て娛樂とす泉々堂の號は先の先迄研究するが特長なる爲め先先の片語を泉々堂と名付けられしなり現に奈良縣王寺鐵道官舍に住し研究を續けられつゝあり

（愛　泉　記）







（大正六年十二月十五日發行）

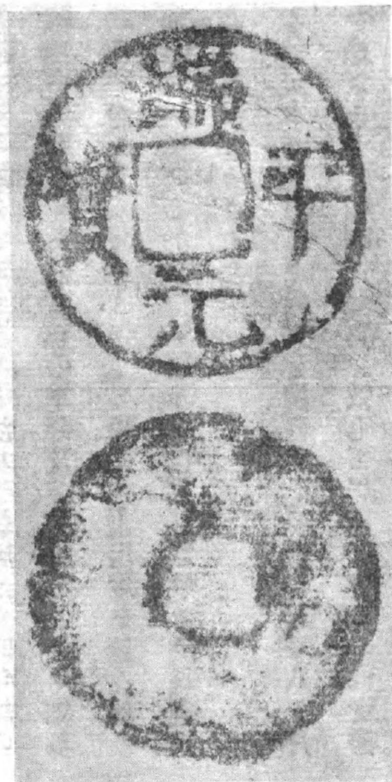
古錢　第八號



初見錢之紹介

◆端平元寶　重四匁一分三厘

青森　山蔦藏



鐵製當十背腐蝕甚だしく文字を見るべからず縁に丸味あり四川蜀道にて獲たりと云ふ

◆紹定元寶　重二匁七分五厘

同上

鐵製當三錢背面穿下五字あり穿上文字あるが如きも不明なり、されど他錢につきて見るに穿下の五字明にして而かも穿上明かに文字無きものあるを見れば本品も穿上文字無きものなるべし



◆嘉定元寶　重一匁一分四厘

同上

背利州一とあり鐵范銅鑄にして銅質黄白色を呈す成都府にて獲たりと



◆大正六年を送る

光陰は矢の如くであります大洪水や暴風雨や四年越の歐洲の大戰亂や露國支那の革命及び内亂など種々雜多の出來事が相次で起りまして恰かも走馬燈を見る如く暑いとか寒いとか言つて居る中に大正六年も將に過ぎ去る事に成りました

本誌が本年五月孤々の聲を揚げましてから早や八ヶ月を過ぎまして順調に發育を致して居りまするのは愛讀者諸君の御愛顧に外ならぬと有り難く思つて居ります

今ま大正六年の古錢界を顧みまするど守田寶丹及今井鳳山軒の藏泉を初め尾の道の網宮春泉堂、宇治山田の松葉二翠庵、長崎の小川洞溪等諸家の藏錢は皆大阪の某々家の轉藏に歸しましたのは特筆すべき事であろうと思ひます又神戸の木村布流瀬爾、大阪の水野方圓堂兩氏の物故せられましたのは心細き感じが致しますが又新に研究家の増加致しましたので十分補充が出來る事と存じます

猶今後の本社の畫策して居る事も又聊かながら抱負もありまするが是は追々と發表致します事と致しまして改年と共に本誌は第二卷第一號といたします二卷壹號に掲載すべき項目を擧げまするど

午年の古錢に付て　三上花林塔
午歳に鑄られた古錢に就て　安藤游仙
高麗錢誌(續)　藤間常平庵
所感一則　安藤游仙
隆平富壽三方目出度い　下間虎僊
古錢百談　古泉學道人
勅題と干支　西殿愛泉
古錢商の大阪　東谷龍堂

此外永野家記錄は益々進行して鑄錢の事から當時の經財狀態迄にも說及ぼし其他の記事も愈々洗練致しまする筈でありますから讀者諸君に向て倍舊の愛顧を希ひますこれを納刊の辭と致します



投書歡迎

◆穴一錢　前號續

東京　花林塔主人

さて最初の「福一」はどういふ方式でやりましたかわかりませんが、「穴一」となると我々の行ふたのは、彼我の「コマ」全部を穿ちたる穴の中に投入し、彼此交互に各自の「玉」を以て穴中を望んで力任せに投じ、穴の中にあるものを、穴の外へ彈き出して、其出たるものを利するのです、故に「穴一」なる成語が出來たものと思ふのです

此「穴一」の外に「キヅ」といふのもあります、是も支那の遊戲で、いづれも「コマ」には現物の通用錢を用ゐて行ますものですから我々は親から禁止されてやる事が出來ませんから、他人のするのを見て居るばかりでした

此遊戲が錢を用ゐて輸贏を爭ふのですから全く賭博と同じなので、我等の禁止されて行はなかつたのも道理であります、故「寛永」や「洪武」やの常に見なれたものを作つた製作者の意中も忖度されます

「面打」のやりかたは二種ありまして、其一方を「おこし」といひます、是最初歩のもので、彼此各一を出し交互に己のものを以て敵のものへ上より落下しつゝ打當て裏返りたるものを利するので、是は屋內、屋外、地上を論せず行ふ事が出來ます、他の一法は「ぶッつけ」と云ます、之は地上に圓を劃し、其內へ彼我各一を出し、己のものを以て敵のものゝ外側へ打ち當て、線外へ彈き出して之を利するので、是等の遊戲は三人でも四人でも出來るのです、此「おこし」「ぶッつけ」といふ名稱は東京の方言ですが、各地國を異にすれば地方々々の方言もありませうし又「面打」のやり方も種々ありませうから、御存じの諸君は本誌にて增補追加せられんことを希望します、古泉會の餘興に大供が行て見たいです

さて「穴一」「キッ」「面打」等は前に述たる如き方式で、

三

弾き出すべき「玉」には厚く且大なるものを要求します是厚肉繪錢の因て起る原因であります、故に私は厚肉の繪錢は皆「穴一錢」であるといふのです、論より證據は皆さんの御藏品をよく調べて御覽になればわかります、疵だらけのや、外側の丸く打潰されたのやが多くありませう、夫がないのは行使されなかッたものです

是等の遊戯は「敵に勝つ」「利する」といふが目的ですから、「勝つ」則「强い」又「利す」等の意味ある「玉」を喜ばるゝは人情、大人も小兒もかわりません、其主意からして「辨慶」「蛭子、大黒」「駒引」などの圖案せられたる繪錢は直に取て用ゐられ、夫等の重且大に作られたるものは皆是等の要求に應じて作られたものと私は斷定したのです

又是等の戰鬪法は皆敵のものへ打當てるのが主意ですから「當る」といふ緣語から思ひ付いて大成効を得るものを「當てた」「當り屋」といひ、芝居などの大入を取りたるを「當り芝居」「當り狂言」といふよりして劇場をシンボルする座主の紋や座の紋や、夫から當り芝居で評判のよい役者を「當り役者」といふより、其役者の紋を鑄出す事になり、人も喜んで夫を買ふよりして終に鏡屋でも製造販賣する事になッたものと思ひます

四

此遊戯の起原は私の考へ通りとすれば九州が起原地ですから逐次關西へ及ぼし京阪地方に流行し夫より關東へ傳播したものとします、故に此種の「穴一錢」は京阪地方に多く、又役者の紋も京阪地方の役者の紋が多いので、隨て製作地も京阪地方となるのです

此「穴一錢」の事に就ては故方圓堂水野翁も、たしか「集古會誌」へ「鏡屋錢」といふ題で御書きになッたと覺ねて居ります、今手許に御座いませんが誰樣(どなた)でも御所持の方は故人を偲ぶよすがに本誌へ再錄あらんことを希望いたします

◉古泉匳銘

萬世之貨千歳維新。天龍集會靈泉有神。仰察治亂俯觀古人。匳裡長靜既壽永親。

右攝北池田住　荒木繼三郎（方賦）

◉泉匳銘

一匳に納めて愛るたのしさよ
嘗こやまさの古きたからを

右尾陽一豐舍（符合泉志編者）

◆琉球通寶の分類（前號續）

京都智山大學　久志卓眞

(2)當百文字（背の當百字肉厚く且つ其字体大なり）

一中字　文字整然面文大きくして　五品（通のマの部分二より小なり）

二背文大字　製作2の一中字に似たれども琉球の二字稍中字より大にして背文亦大なり通の字のマなる部分一の中字より大なり　三品

三縮球小字　琉球の球の字球となるなり普通の球は球の如く延長す　四品

四小字（面文）　之は三の小字の球の字（く）が延長せるなり即ち斯くなるなり球（く）珍にして二品

五大字（面文）　當百中唯一の最大形珍中の珍たるを現れず濶縁にして半朱の大様中字に相當するものなり當百の背文は中字等より稍小なり　一品

以上當百大字は甚稀少なり、琉球通寶當百八百枚中十五枚の割合にて其割合殆んど小字と同じく一、八パーセントぐらいのものなり實に其形体獨特にして大いに其の趣を異にす

(3)濶孔郭大字　之は名の示すが如く孔郭太くして面文は大字當百の二背文大字程あり背は殆んど小字の背の如く當百の二字小なり一種にして手替り無之其割合七或は八パーセント即ち七分或は八分なり

(4)中字普通のもの之に二種あり

一濶縁　之は濶縁と云ふ程のことなきも言葉に現す上に於て斯く云ふなり、二の細縁とは殆んど異る所なし然れども一般濶縁は字肉太く特に通のしの濶或は細を見る時は直に分別することを得二細縁より僅少し即中字の中四割六分許を占む

二細縁　之は濶縁の説明にて略、知る事を得可し即ち字肉細く通のし特に然り中字の中五割四五分を占む

以上中字は當百中九割を占む最も多くして普通我等琉球當百と稱するは之なり

今迄述べ來れるものゝ内最も珍なりとするは當百にては當百大字中の五大字と小字、一正配琉球に屬するも

の〻中の最美品、半朱中に於ては一大様中字二潤縁三小字小様四細縁細字なり最普通とするは當百にて中字二種半朱にては中縁なり

大体の分類と其割合を表記せん

半朱（琉球全体中）割合　三五パーセント

當百（仝　上）仝上　六十五パーセント

I 半朱（一〇〇、パーセントとす）

手替一、二、三、四、五、六、七、八、十の九品

合せて（二、パーセント）

九、中縁（九七、二パーセント）

II 當百（一〇〇、パーセントとす）

1 小字　一、五パーセント

2 大字當百（當百大字）　一、七パーセント

3 潤孔郭大字　八、パーセント

4 中字　八八、八パーセント

中字 一潤縁　四〇、パーセント

中字 一細縁　四八、八パーセント

即ち當百の小字及び大字當百は百枚の當百錢中各一枚

太

半の割合なり之れより見ても小字大字當百の珍なるを知る可し、而して今迄述べ來れる所は小生の愚見にして到底依る可き性質のものに非ず小坂脇氏所有の半朱異所錢等も一度打形なりとも拜見致し度と思ひ居れるなり、然るに此異書錢の如き珍品を分類中に加へ得られざるは余としては實に殘念なり又其態度不忠實なり然し余としては斯かる嚴密な意よりして分類せしものに非ず今後も又其方面に向ひて研究し新發見にても有らば亦之に加へんとするものなり仝時に又琉球通寳に對する智識ある方の宜しく御教導を乞ふものなり、而して琉球通寳は鹿児島縣にて鑄し事は動かす可らざる事實なるも其錢史の如き参考書の無き爲め之を徹底的に研究するを得ず願はくば錢史及び琉球に關する史實の本等を有せらるゝ方の余に對して研究資料を與へられん事を切望する次第なり（押形を添へられしも略す）

◎太平通寳　此ぜにを持てはひまごからしやちほこをおがみ、はまだめからこらのいきをいになる　　柿栗山人

◆青島物語

姫路　藤田愛泉生

□□ 大錢の瓶敷よりも看板 □□

本誌第一號に大錢の瓶敷として空想的摸造錢が奈良に於て鑄造せられて居るとの記事が掲載されて居りましたが當地にはまだ〳〵大きいものを鑄造して居りますから報告いたしましよう濰縣の東關と云ふ處に現在鑄造して居りますものは直徑四寸（大觀通寶）直徑五寸（大泉當千）と云ふ頗る大なるものがあります地質は眞鍮でありますが青黒の古色を帶び如何にも古錢らしく見ゑますが新らじく鑄造して居るのです内地から來たものは珍らしがつて求める人も澤山にある樣です、瓶敷には少しく大き過ぎるかと思ひます、之れを古錢屋さんの看板にでもはめ込んだなら一寸面白いだろうと思ひます

□□ 支那銅貨中の珍 □□

支那は御承知の通り各省毎に銅貨を鑄造して居りますから其種類は幾百あるか分りません以前に鑄造して居りますものは日本と同じ樣に當制錢一文、二文、五文十文、二十文でありますが現在通用して居りますものは十文即ち一錢銅貨丈けの樣であります支那にも有穿銅貨を鑄造するとか鑄造して居るとかきゝましたがまだ見たことはありません此の澤山な種類の銅貨の中で頗る珍らしい、めつたに目にかゝらぬものは左の一種でありますこれは支那人は古錢扱ひにして居ります



◆柳北遺稿

濹上漁史

成島柳北翁は帝都墨堤に居し其碩學にして古錢の鑒識家たる事は江湖の知る所なり今明治十四年四月京

松石子疊韻して贈らる(略す)

ねみだれ髪(第四)

松石子三溪翁既に去る漁史爛醉將に眠らんとす適ま舟玉卿來たり訪ふ漁史欣然枕を推して起て曰く余客歲病で將に死せんとす自から謂ふ復た汝を見る能はずと圖らざりき今日茲に相見んとは醉ふと雖とも又飮まざるを得ずと乃ち燭を剪て再び酌まんとす恰も好し山田志馬亦友人を拉して歌舞練場に在り价を馳せて漁史を邀ふ玉卿を携へて直ちに往く舞技罷で又万亭に赴き痛飮して去る四日快晴宿醉起つ能はず頭重く脚軟なり按摩を呼べと命ず小婢答て云ふ本府往年より按摩を禁ずと漁史大笑して曰く我れ之を知れり然れども新大爺既に其禁を解きしならん婢曰く否々漁史失望極まり復た衾を擁して臥す忽ち剝啄の聲を聞く誰ぞと問ふ曰く小倉佐七(鳳泉堂)中島喜兵衛(泉貨堂初代)なり近日古錢數種を獲たり來たつて先生の精鑑を乞ふと漁史心喜び神蘇す急に二客を延き品評數刻天既に午なり乃ち二客を拉して三杉堂に赴く堂主は舊知なり直ちに酒を呼び妓を聘す內藤盛孝亦題して來たる遊興益々旺す坐間一絕を得たり

老來猶受小裙釵。　又買芳樽向鴨涯。
柳眼花脣春若錦。　縱歌呼起舊風懷。

一小妓極めて清婉箋を展べて漁史の詩を乞ふ乃ち書して贈る

侑杯捧硯座多時。　花樣容顏月樣眉。
慧眼憐他認文士。　彩箋請我寫新詩。

惜い哉漁史醉て其名を忘る飮んで二更に及ぶ比衆皆散ず漁史酩酊歩する能はず盛孝に扶けられて寓に歸るを得たり

漁史西京に來たりしより詩酒追逐殆んど虛日無し然るに東京自由新聞は漁史の西遊を臆測して本願寺及び大阪両新聞の葛藤を解かん爲めなりと記せり嗚呼漁史は元來面倒なる事が甚だ嫌ひの男なり何を苦んでか此の好時節に負き他の紛擾に關せんや其れ程氣のきかぬ男と漁史を思ふは自由記者も亦酷なる哉論より證據漁史は此回往返とも大阪へは立寄らぬなり請ふ俟一俟せよ。

ねみだれ髪(第五)

五日晴漁史翠上人と偕に京に入りしより已に五日を經たり漁史は日に故舊と遊び上人は本山に大法會有るを以て亦日に匆忙未だ一刻の閑話を爲すを得ず是の日法會全く畢り漁史亦少しく閑なり乃ち相携て博覽會場に赴く往年は該會を大内の殿上に開きしに今は會場新築工竣り布置極めて整頓す之を我が東京の勸業博覽會場に比すれば其の規模の大小素より論を竢たずと雖ども其の結構の佳にして便なる園池の幽にして雅なる寔に感嘆す可きもの有るなり府廳の心を用ひたること淺少に非ざるを知る而して觀客は甚だ寥々たるが如し蓋し年々開場の故ならんか出品は陶器織物を冠とす美にして且つ廉なり他は錄するに足らず木屋坊の金石樓に過ぐ山田氏の寓なり漁史京に來たるや必ず木屋坊に寓し日に東山を望む這回寓宿長からざるを以て此に卜せず本日此樓に上ぼり徐に東山に對し曾遊を追憶すれば感情に堪へざるもの有り此夜深澤子神戸より來たり鴨東に在るを聞き又往て一酌し神戸の遊びを約して別る。

(未完)



考証史料

◆永野家記錄(前々號の續)(禁轉載)

(永野政之助石卷鑄錢場出張中日記)

一當節場所詰左之通

勘定奉行
鑄錢本〆兼 石川八右衛門　本〆添役 金須秀次
横目 伊藤養輔　役人 丹野武治
加勢役人 板橋升　下役 阿部與平治
下役 片桐三郎太夫　〃
小人目付 二人替合　改門 下番一人宛
右側 床頭一人、足輕二人、下番二人、同二人
外門番見張床頭一人、足輕二人
右見張所内五ヶ所壹ヶ所二人宛相詰候事

一領主より手當金渡方左に

金五拾両　引請人 菊田源兵衛　代役 青山重助

二

代役 菊田源太郎
金参拾両 代役添役兼 浅野屋利兵衛 名主阿部
秀蔵 會所詰合勘定役主立 伏見清兵衛
金拾五両弐分 平勘定人 大森屋忠兵衛伊勢屋源次郎
金拾弐両 書記役 彌五右衛門 買入方渡方 阿部
屋嘉蔵、同徳蔵、櫻田屋敬吉、菊田
屋稻吉、京屋善次、梅津屋庄五郎、
吉兵衛 〆七人
金拾五両 役屋支配人 千田屋久兵衛
金拾両 役屋 神野屋忠次、高橋勘兵衛、富永
屋春吉 茶番 長井屋傳吉
金拾弐両 臺所惣締役 平塚屋勘三郎 上臺所二
人 下臺所四人
金七両弐分 番屋頭 源助 湯屋支配 甚吉 日行事
場書記役 竹内屋久作 大吹棟梁 太田
長五郎
錢四百六拾文 脇棟梁 石塚今朝五郎、太田豊蔵、櫻
田屋万蔵 大吹主立 善五郎、徳蔵、
忠作
錢弐百弐拾文 大鼓打大吹所部屋頭 友七
錢三百文 銑割主立 齋藤富治 人込方 和泉屋勘
藏 帳付 熊蔵 棒頭 富蔵 小頭 兵吉
踏鞴場四十八人
錢二百文 日々出人足二十人
金拾五両 北方銑屋 佐藤屋榮助
金拾両 同下銑屋 塚田屋忠蔵
金拾五両 南方銑屋 千葉屋利三郎
金拾両 同下銑屋 黒川屋庄松
錢弐百文 砂燒場主立 良助 砂焼 十五人
鍜冶方主立 惣五郎 大工棟梁 藤右衛
門 同脇棟梁 新作 髪結主立 廣吉
同 勝蔵
形場弐拾八ヶ所之内
東之方形場拾四ヶ所
北側 錢頭主立 友吉 並錢頭 亀吉、久三郎、門之
助、藤吉、長八、由蔵 〆

南側　銭頭主立茂吉　並銭頭五兵衛、熊三郎、粂
藏、利助、徳次、熊之助　〆
西之方形場拾四ヶ所
北側　銭頭主立四郎助　壹方惣締年寄彌兵衛
並銭頭久藏、勝九郎、伴次、富八、喜四郎
南側　銭頭主立吉三郎　並銭頭忠吉、惣與次、良
助、銀次郎、善七、與六　〆
右貳拾八形場之内壹形場に壹人宛都合貳拾八人也

賃銀之覺

一東西灶方三百八人
右者壹灶に付拾壹人にて増人共に賃銀渡方之儀は出來
銭拾分壹相渡候
此内譯　拾貫文に付
一貳百五拾文　銭道　一百六拾文　番子
一百四拾五文　下形　一五百文　引返し
一九拾文　砂拂　一八拾貳文　濁人
一三拾文　種銭
仕場方に相廻り候者
一五拾文　代摺頭　一四拾四文　並代摺
一四拾四文　同代摺　合賃銭壹貫文
外に増人壹人有之候には右賃銭を吹方に對し銭頭手
前にて自分相補候事
一大吹所船場其外共飯焚出し方六人
右壹日壹人に付賃百三十文立に有之候處貳百文に相
改る
一鑢磨方拾六人
右は壹日壹人に付百參拾文立
一元踏鞴場四拾人
右は壹日壹人に付貳百文立
一仮踏鞴場四拾人
右は壹日壹人に付貳百文立
一大吹所四拾九人　内　脇棟梁二人　ルスハキ三人　湯
入七人　銑留二人　炭焚二人　金斗二人　炭臺四
人　香盤春二人　土モミ二人　下鉢六人　外片付
三人　鉄斗二人　銑鉢九人　飯焚二人　部屋頭一
人

右金斗と申者江戸表小管御場所におゐて金盛と相唱候　右銑鉢と申者江戸表小菅御場所におゐて汰り物方と相唱候　右鉄斗と申者江戸表小菅御場所におゐて銑鉄入と相唱候
右は賃銀高下有之候得共凡割並壹人に付平均貳百五拾文立に相成候由但脇棟梁は除之
一砂焼場拾五人
右は壹日壹人に付貳百文立
一銑鉄照し幷割揚
右は銑鉄拾貫目に付八拾五文立岩銑鉄に候得は同斷九拾五文立
一形大工
右は壹人に付壹日賃錢貳百七拾文立
一鍛冶方
右は壹人に付壹日同斷
一日々出人足拾人
右は仕事多少により人數増減も可有之當時右人數壹人に付賃錢貳百文立

合人數五百拾貳人
但壹人に付壹日白米七合五夕立之積を以相渡す
取締向
一粗鉄割場ゟ渡方之儀幷右粗鉄割揚之分収納共に取締之儀は横目見届にて役人幷下役買入役立合之上銑藏より出入いたし候尤錠前封印之儀は横目方にて取締居候
一大吹所ゟ割銑相渡候砌は横目幷役人買入役之者立合相渡申候
一鑄放錢収納之節横目幷役人下役勘定役立合にて貫目相改銚屋之藏ゟ仮納いたし翌日未明臺摺之者ゟ相渡仕揚錢取調仕候錠前封印之儀は横目方におゐて取締居候
右之通
當鑄錢場にて相用候銑鉄左之通
一領内本吉郡北方氣仙猪折と申所より出候岩鉄銑岩井郡東山津谷川と申所より出る砂鐵銑右は壹ヶ年積壹萬貫程より出不申候由にて南部より岩鉄銑砂鉄銑両

様買入候而相用候

但最初之内は砂鐵銑而已買入來り候處當月より岩鐵銑も買入候事に相成る南部より買入相場當節左之通

岩鐵銑金壹両に付拾九貫目替

砂鐵銑金壹両に付拾八貫目替

（以下次號）

◆東山時代の永樂錢

天武白鳳三年吾國に銀はじめて出しより銀錢を用られしと見へたり其十二年に及びて銅錢を多く用ひて銀錢を止められし也たゞし此頃の銅は外國より來れる成べし是より先は米穀絹布を用ひて物を交易せしなり（中略）村上の天德二年乾元大寳を鑄て此後本朝にて錢を鑄られし事いまだ聞ず皆々異朝歴代の錢を用ひしと見へたり、斯て大明永樂の天子太宗に鹿苑院公方義滿彼國の封爵を受られ其後異朝にして永樂新錢を鑄られしかば我國へも分ち賜へり其後東山公方義政の代に奢侈を好むて國用乏しかりければ寛正五年文明七年同十五年三度迄大明の天子に錢を送らるべき由を望請申さる中にも文明十五年には十萬貫をたに玉はりなば我國の用足らんと歎き申されき其頃には如何程まで我國の財用は乏しかりき又案るに一説に永樂天正の頃より我國にて永樂錢を通用せしと云事あり是は永樂壹貫文を以て古錢四貫文に當永樂錢法にて古錢を以て用ひられしと云事也（中略）慶長十三年十二月永樂錢を止め京錢を用ふ京錢とは異朝代々の古錢也是より永樂錢の法は止しなり寛永十三年六月寛永通寳を江戸と近江の國坂本と両所にて鑄らる是よりして本朝の銅錢ゆたかなり猷廟の御恩德も亦有難き事なり、是より後寛文年中又新錢を鑄らる裏に文の字をしるさる（中略）唐土も漢の代程黄金多かりし代はあらず代々を經次第に金銀少く成し程に宋の中頃より交鈔と云て我國の紙錢の如くなる物を用ひ國用を通す元朝に至ては專ら交鈔斗りを通し用ひ明朝に至て銅錢を以て交鈔にまじへて今に至るなり是漢以後は金銀銅とも出る事多からぬ故也（中略）漢以後の金銀銅の次第にうせはてし事五胡五代の遼金元の代々

の亂に夷狄の他に取行亦海外の諸國交易の爲に失ひたり我國の昔より用ひ來りし銅錢は皆異朝の錢也日本一步に取來りし事斗も夥しまして萬國に取行し事を斗るべし（始終我國の金銀銅外國へ出る事を深く憂ふ）

右五事略　新井白石著

◆土佐通寶錢に付て

虎　僊

土佐通寶當百錢及當二百錢の二種は土佐藩及大阪難波天保通寶當百錢鑄造の錢座に於て鑄造したる事は識者の既に知らるゝものなるも余が數年間土佐錢に付て研究したる事實を左に記載せん

余が開業以來上京毎に中島孝治郎氏（二世泉貨堂）より聞けるは土佐錢は皆種錢にて通用錢の存在なしとは余の耳底を放れず一時も忘れし事なかりしに過般當地水野方圓堂及飛香館の土佐通寶當百及二百の二種を見て成程種錢と首肯せるが其他の當百及二百は全く前記二品と製作をことにせるものを散見せり余は此れ必ず通用錢なるべしと思ふ何となれば平地淺く面背及輪側に鑪目深く有りて全く普通天保當百の通用と替れる處なし又種錢と余が首肯するものゝ製作は面背の約束何等母錢と替る處なし今種錢及通用錢を重量に付て左に示さん

土佐通寶當百錢	種錢六匁以上	通用五匁五分以下
同　當二百錢	種錢十三匁五分以上	通用十一匁以内

以上は余が推定を記せるのみ記して大方の諸君に質し研究ある諸君の敎へを乞ふ



古錢百談

雜誌、書籍の抜萃　古泉學道人

東京古泉協會雜誌に三十餘年前の古刀布錢の價格に付て秋陵君の記に

此頃の愛泉家諸君は三十餘年前に於ける古刀布錢類の如何に高價であつたかを御忘れの事と思ひますから左の價書きを記して溫古知新の一端に供します

守田寳丹君より同族守田重兵衛君へ讓られたる諸錢の價は今日の眼より見ると唯々驚く許りであります

記

○安邑化一金布　此品明治泉譜三集原品　金參拾圓
○安邑化二金布　同　上（嚴島柳北傳來）金六拾圓
○空首武字布　同　上　金五拾圓
○同　無　文　同　上　金參拾五圓
○瑳　陰　布　同　上　金參拾圓
○戈　邑　布　同　上　金拾八圓
○大形安陽布　同　上　金貳拾五圓
○平　陽　美　布　金貳拾六圓
○圓足関字布　金拾八圓
○安陽之法貨　此品明治泉譜原品　金貳百五拾圓
○圖首白化刀　同　上　金拾五圓
○王莽金錯刀　同　上　金參拾圓

以上は買入原價なりと』今日の價格と雲泥の相違驚くべし

○丹波北の庄發見錢

丹波龜岡より西北二里餘北の庄村舊內藤備前守古城の麓なる某寺附近より掘出せしは寛政九年己閏七月十日

の事なり二重壺に入れ壺の外は炭にて詰め壺の後に盤石ありて其石の下に矢の根ありしが何れも朽て碎けたり發掘錢の種類は

○和同開珎廿　品程（此内はね一品　潤縁禾三品　枚數符合せず　細縁禾四五品　私鑄潤縁二品　原文のまゝ）
○萬年通寶十　品程（内横點一品有り）
○神功開寶四十品程（此内大形一品　大形潤縁背爪一品　潤縁細字一品　小形潤縁星一品　背左右星一品）

都合八十品ばかりなり以上荒木方斌說

此内はね和同一品讃岐香木舍に現存せる由神功錢中不力一品は當地原田元寶堂所藏古色優秀一名此を精美神功と稱し元寶唯一のものなり神功錢中星云々は鑄溜りの事ならん世に有名なる北の庄掘と稱するものは上記の如くなり

○淀川掘出し錢の報告

余が明治四十二年五月迄に當地淀川發見の皇朝錢の報告を大阪古泉會雜誌に記せる事あり本誌に再錄して讀者に示さん

○和同開珎　數百品　大同小異
○萬年通寶　四十二品　內横點六品小形二十一品

○神功開寶	四十七品	内大形八品側功六品
○隆平永寶	六十五品	内大形四品廣穿六品
○富壽神寶	二十九品	大同小異
○承和昌寶	三　品	普　通
○長年大寶	五　品	普　通
○饒益神寶	三　品	同　上
○貞觀永寶	一　品	同　上
○寛平大寶	二　品	同　上
○延喜通寶	二十七品	大形二品鉛錢五品
○乾元大寶	五　品	内鉛錢一品

明治四十二年六月以降は後日詳細調査の上掲出すべし

○齊刀錯刀の詩

北宋の詩人梅聖俞一日劉原父の家を訪ふ原父酒を置きて欵待し古錢二枚を出し示して酒を侑めたりき、其の一は齊の大刀にて長さ五寸五分他の一は新の錯刀にて長さ二寸五分聖俞乃ち詩を作りて曰く

獨行齊大刀　鎌形末環連
文存半辨齊　背有模法圜
次觀金錯刀(王莽時物長二寸半)　一刀平五千(其文如此)
精銅不蠹蝕　肉好鉤婉全

○柞原上棟錢

大正新撰古錢之栞第二集第七十四、七十八の二種は和漢三才圖繪に柞原大明神大分郡にあり一名を西寒多之神といふ豐後の一の宮なり祭神は三座にして神功皇后、應神天皇、武内宿禰を祭る、神階貞觀十一年三月廿二日從五位下、社家百廿社僧十六坊とあれば往時は可なりの大社なりしを思はしむ柞原上棟錢は該社南大門建築の際祝賀錢として調製せるものにて年代は慶應三丁卯年五月上棟式執行の際配布せしも二種あり存在少なきものなり



古錢に就ての御問合は短文に願たし

孔方生

問　圖鑑に掲載なき品にして小生が目撃せるものに付

て(一)寛永二厘背外輪上下に口の中に夕の字の極印あるもの〻價格(二)鳥居稲荷小形錢の價(三)寛永二厘背二十一涙にノあるもの(四)寛永長字錫錢(五)元豊折二(六)貨布(七)立念佛背十一波(八)寛永銀錢(九)元祐通寶背文の種類(十)聖和同は大阪東京に約何品ありや

答　随分長い御尋(一)戯れに打たるもの十錢(二)鳥居稲荷に小形なし模品か(三)廿一浪に背ノなし(四)鉛錢なし錫なれば四五圓(五)五錢(六)四五十錢(七)見た事なし(八)一圓以上(九)七八種(十)十品位ならん

伊豫松山　番太郎生

問　厚錢戎背寶盡し、七福神背金守の二品は南部錢なるか其價格

答　貳品共南部地方の鑄造品ならんも眞物には非ず模品なるべし一枚二三十錢位

満州開原縣　豊村生

問　眞鍮厭勝錢一本萬利及環付乾坤錢の價格を問ふ

答　一本萬利押形拜見珍品一圓位環付乾坤二圓位

高松　究泉堂

問　皇朝錢は和同開珍以前に私鑄錢ありしは事實なり然るに只一品の現存品なしとすれば疑なき能はず果して右私鑄錢ありしとすれば錢體の形狀如何大方識者の高說を俟つ

答　大議論なり先つ暫く御答へ致さず讀者諸君一つ議論を御投書ありたし(此種投稿歡迎)

姫路　藤田愛泉生

問　山東より歸姫直ちに探泉せしも當地は少し又同好も少し虎僊樓先生も姫路出身とか聞及べり當地の古泉家御教示ありたし○近頃成泰通寶一枚入手支那錢なるや如何○表面立念佛背行書念佛一枚入手其價格○厚肉釣上げ戎の價格○古錢雜誌紙數を增加し讀者倶樂部欄を設けられたし○旅行を利用し其地の古錢家訪門し錢說及所藏品拜見し斯道發展上益する事多し故に古錢家を每號本誌に紹介せられたし

答　西澄町森豊吉、大野町河野九平、俵町松浦伊五郎其他二三あれども記臆なし○安南國錢なる成泰背十文は二圓位無背三圓位○表面立念佛背行書錢模造○釣上げ戎一圓以內○本誌紙代印刷費騰貴のため紙數減少其內增加の時期あり讀者俱樂部二月號より設く古錢家紹介は旅行の方面本社に尋合し本社の照會を求めらるゝが便利ならん然し近く古泉家番附東京に出版せらる付て見られよ

◆海外彙報

○

軍需品其他の工場急に盛況に向ひたる爲めか米國合衆國にても補助甚だ拂底せる趣にて同國內費府桑港デンヴアー、カーソン四ヶ所の造幣所に於て金貨の鑄造を中止して専ら小銀貨の製造に全力を注ぐことゝなれりと

○

合衆國にては十五仙貨幣を發行せんことを要求せるものあり活動寫眞會社は從來の入場料十仙を此がため十五仙に値上げすることを得るならんと運動おさ／＼怠りなしと先年三仙貨幣發行に就て議論ありしとき電車料五仙均一なるを此がため三仙に値下げせざるを得ざるに至るならんと電車業者の大反對ありしと同樣裏面には種々の魂膽あるを察すべし

○

葡萄牙國にては銀貨銅貨の全部を流通上より引揚げ紙幣を以てこれに代わんとすと云ふ多分時局の影響の爲ならん

○

獨逸國にては人民が私に小貨幣を蓄藏するため通貨の拂底なるを防がんとて千九百十七年即ち本年以前の小貨幣は千九百十八年一月一日以後一切通用を停止する命令を發布せりと亦必死の窮策と云ふべし

◆古泉界報

報　告（高松から）　高松泉狂坊報

當市五番丁香川縣立工藝學校に於て去る十一月十七日十八日の兩日創立第二十五年祝賀會を擧行し古今の工藝美術品名畫一千有餘點就中歴史部に於て中川時計店出品の古金銀貳拾餘點日本繪錢支那厭勝錢百餘品藩札古紙幣等一百五拾餘點太田菊堂氏所藏の明治泉譜第一集一組等陳列せり坂田香川縣知事藤本高松市長始め豪商紳士當市中の各學校々長敎授生徒及一般の市民縱覽者頗る多く兩日とも殆んど一萬人以上なりき

（此種の報告歡迎）

報　告（奉天から）　滿洲研究泉人投

前略御承知の通り最近滿洲內に新愛泉家五十名以上出來候爲め古錢は珍品尠少にて困り候滿洲には錢商なるものなく爲めに自分等が集めたるものを泉友が分讓とか割愛とかを申越され自家愛藏以外は先年他へ賣却致候併し貴家は古錢雜誌を發行せられ泉界の爲め多大の御盡力感じ居候附ては泉々及貨々天總通寶背十字等は小生不用に相成自然御希望の方有之候はゞ讓渡し度候先は右報知致候追々滿洲の古泉家を訪問致し御報告申上度候早々

報　告（京城から）　岡田生報

虎僊兄當地の古泉界を報告せよとの事別段報告すべき程の出來事もなく候御承知の如く時下農繁期にて珍品を齎らす者なく今少時は現狀維持なるべし當地は先般古泉小集會を催し來會者十四五名あり何れも相當の珍錢を出陳したり中にも金及銀錢の開元通寶常平通寶戶十大錢は珍らしく拜見致候三韓海東東國普通品は中々澤山有之候開城發見のものは北もの慶州のものは南物と一般に稱へ居候普通品御入用に候はゞ何時にても御世話致候也　下略

報　告（伊豫今治から）　山口安治郎報

當地には秋山、田頭等を第一の好者として私等は第三流の好者に候旣に六回古泉會を開催し追々愛泉家も會每に增加致し當地の古泉家は自分の名を出す事を憚り

内々集め樂み居り候人も少なかず候一度御來遊被下候はゞ古泉會も催し度存居候也猶貴社愛泉君に宜しく御傳へ被下度候早々

報　告　（滿洲四平街から）　創　榮　生　報

前略過日當地より百六十清里の太吃咀と稱する某縣知事の友人某老人（支那人）古錢を愛藏致し居り過日知事に要件あり序に古錢の有無尋ねし時紹介せられ拜見仕候處槪ご一と通りは持ち居る所にて小生も初めて支那の古錢書（書き寫し）を拜見仕候其內澤山の高價錢も持ち居り實に羨望に堪へざる所にて候故一度讓渡しを尋ね候處何れも一個拾圓位と申し居り手の出し樣もなく候が大略大正古錢價格圖鑑により時價を知るも又中には價格の記載なきものも持ち居候もし珍品に候はゞ二三品買入たく存じ候も其時價を知らず左のものは同人の所有なり

○大泉五十背四出　○大泉五十面背四出
○至和重寶折二錢　○朝鮮通寶（明治泉譜第三編掲載）
○常平通寶（小樣銀錢らしく碁石形類笑）　○穪法元寶（稱字不明なりし爲め歸宅後調査判明）

其外名も知らざる珍品澤山有之珍品のみ約千種と思ひ居り候も皆厚紙に無秩序に縫ひ付けて置き何れが高價

なるや敢て價格は知らずして只多年の實地經驗にて其名の多くあるが少々存在するかを知れるのみにして幼稚なるものにて候但多年やり居る故銅質及正品及年の古新は小生より中々細しく有之候が某氏に賴みて何んとか出來るならんと一縷の望みは有之候但し何れのものか珍らしきや知らず閉口仕居候（至和重寶でも五銖でも混合の上）猶小生は月に一二回田舍の大人の所へ出張の用件有之時々舊家に何處も多少は古錢を置く故一ッ二ッ貰ひ來り居候が其爲め今日では中々の愛泉家と相成居候尙手持なき分を切に探し居候其內珍品を入手し御廻報申上候も最近の泉況以上の如くに有之候也

豫　告

讀者諸君に報告す本社に於て懷中紙入用の輕便なる皇國略年表早見を調査し以て第二卷第一號即ち新年號の附錄とせん爲め目下石版印刷中に有之候猶又新年號は紙數を四十頁とし尤も有益なる記事を滿載せんとす乞益々購讀御勸誘あらん事を希望仕候

本誌料金不足に相成居候御方は帳簿整理上何卒此際至急御送金被成下度御願申上候也

廣告

拜啓毎々御引立を蒙り難有御禮申上候扨て本年も餘す處十數日と相成自然御多忙と相察し居候處小店事毎年各御得意先樣へ年初に初荷差送り申候處本年は手持ちの品僅少に有之候へ共何か見計らい御手元迄差送り申候間多少に限らず御買上げ被下度且又御入用の品有之候はゞ年内に錢名御一報願度年末の御挨拶かたがた右申添候也

大正六年十二月

御得意樣

虎僊樓商店

古錢雜誌定價及ビ廣告料

代價	一冊　定價	金拾五錢
	六冊（六ケ月分）郵税共	金九拾錢
	十二册（一ケ年分）郵税共	金壹圓八拾錢
	郵券代用一割増六冊以内ハ郵税一册五厘ヅヽ申受候事	
廣告料	五號活字一行	金貳拾錢
	半頁	金四圓
	一頁	金六圓
規定	◉注文ハ一切前金ヲ要ス	
	◉見本ハ郵券十七錢代用苦シカラズ	

大正六年十二月十二日印刷
大正六年十二月十五日發行

發行所　大阪市南區疊屋町十四番地　古錢雜誌社　振替口座大阪三五八〇〇番

編輯兼發行者　大阪市南區疊屋町十四番地　下間寅之助

印刷者　大阪市南區東清水町板屋橋筋東　的田繁吉

印刷所　大阪市南區東清水町板屋橋筋東　三[illegible]堂印刷所　電話[illegible]五二六番